

に供養恭敬を致せ。爾らずんば定めて後悔有らん。故に涅槃經に云く、「菩薩摩訶薩、惡象等に於ては心に怖畏すること無かれ。惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。何を以ての故に。是の惡象等は唯能く身を壞りて心を壞ること能わず。惡知識は二つ俱に壞るが故に。是の惡象等は唯一身を壞り、惡知識は無量の善身と無量の善心を壞る。是の惡象等は唯能く不淨の臭き身を破壞し、惡知識は能く淨身及び淨心を壞る。是の惡象等は能く肉身を壞り、惡知識は法身を壞る。惡象の為に殺されては三趣に至らず、惡友の為に殺されては必ず三趣に至る。是の惡象等は但身の怨と為る。惡知識は善法の怨と為らん。是の故に菩薩は常に當に諸の惡知識を遠離すべし」と已。請い願わくは今の世の道俗、設い此の書を邪義なりと思ふと雖も、且く此の念を抛ちて十住毘婆沙論を開き其の難行の内に法華經の入・不入を檢え、選擇集の「準之思之」の四字を按じて後に是非を致せ。謬りて惡知識を信じて邪法を習い、此の生を空しくすること莫れ。

第三に正しく末代の凡夫の為の善知識を明かさば、問うて云く、善財童子は五十余の知識に値いき。其の中に普賢・文殊・觀音・弥勒等有り。常啼・班足・妙莊嚴・阿闍世等は曇無竭・普明・耆婆・二子・夫人に値い奉りて、生死を離れたり。此等は皆大聖なり。仏世を去りての後是の如きの師を得ること難しと為す。滅後に於て亦竜樹・天親も去りぬ。南岳・天台にも値わず。如何にして生死を離るべきや。答えて曰く、末代に於て真実の善知識有り。所謂法華・涅槃是なり。問うて云く、人を以て善知識と為すは常の習いなり。法を以て知識と為すの証有りや。答えて云く、人を以て知識と為すは常の習

いなり。然りと雖も末代に於ては眞の知識無ければ、法を以て知識と爲すに多くの証有り。摩訶止観に云く、「或は知識に従い、或は経卷に従いて、上に説く所の一実の菩提を聞く」と上。此の文の意は経卷を以て善知識と爲すなり。法華経に云く、「若し法華経の閻浮提に行ぜんを受持すること有らん者は、此の念を作すべし。皆是れ普賢威神の力なり」と上。此の文の意は、末代の凡夫法華経を信ずるは普賢の善知識の力なり。又云く、「若し是の法華経を受持し誦誦し正憶念し修習し書写すること有らん者は、当に知るべし、是の人は則ち釈迦牟尼仏を見るなり、仏口より此の經典を聞くが如し。當に知るべし、是の人は釈迦牟尼仏を供養するなり」と上。此の文を見るに、法華経は釈迦牟尼仏なり。法華経を信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り、此の経を信ずる者の前には滅後爲りと雖も仏の在世なり。又云く、「若し我成仏して滅度の後、十方の国土に於て法華経を説く処有らば、我が塔廟是の経を聴かんが爲の故に、其の前に涌現して、爲に証明と作らん」と上。此の文の意は、我等法華の名号を唱えば、多宝如来本願の故に必ず来りたまう。又云く、「諸仏十方世界に在して説法したまうを、尽く一処に還し集めたまう」と上。釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等は我等が善知識なり。若し此の義に依らば、我等は亦宿善・善財・常啼・班足等にも勝れたり。彼は権経の知識に値い、我等は実経の知識に値えばなり。彼は権経の菩薩に値い、我等は実経の仏・菩薩に値い奉ればなり。涅槃経に云く、「法に依りて人に依らざれ。智に依りて識に依らざれ」と上。「依法」と云うは法華・涅槃の常住の法なり。「不依人」とは法華・涅槃に依らざる人なり。設い仏・菩薩爲りと雖も、法華・涅槃に依らざる仏・菩薩は善知識に非